

地域に根差した臨床と研究から  
住民の健康を守りたい



## 尾崎章彦氏

南相馬市立総合病院  
外科医

医師としての自分の在り方を見つめ直したいと、震災3年後に南相馬市立総合病院に赴任した尾崎章彦氏。すでに行われていた地域住民のための臨床と研究に身を投じ、自らも世界に発信してきた。

取材●田川丈二郎

### ——南相馬市立総合病院に赴任されるまでは何を。

「2010年に大学を卒業し、震災当時は、千葉県の病院で初期研修医をしていました。病院周辺も相応に被害はあったのですが、少し時間が経過すると、研修が忙しかったこともあり、震災自体を意識することは少なくなりました。外科を専門として選び、初期研修が終わる12年には東京都内の病院に戻ることを考えていました。しかし、外科の後期研修においては、地方の病院のほうが手術を執刀させてもらえるチャンスが多いかもしれないという話を耳にし、東京大学の外科プログラムを介して、福島県会津若松市の竹田総合病院に赴任しました」

### ——その後南相馬に行かれたのですね。

「竹田総合病院の研修は充実していましたが、外科医（＝オペレーター）として生きていけるか自信が持てませんでした。その結果、研修が進むにつれ、その後のキャリアについて思い悩むようになったわけです。大学の医局に戻った場合、病棟業務を1年ほど経験した後、大学院で基礎研究に従事します。それが修了すれば、また外科医としてのトレーニングに戻るわけですが、そのときは30歳代半ばです。30歳代前半という貴重な時間をどう費やすべきかと決めかねているときに、震災後に浜通りで活動していた大学の先輩（坪倉正治医師）から声をかけていただき、今後の自分の医師としての在り方を見つめる意味合いも兼ねて、南相馬市立総合病院に外科医として赴任しました」

### ——そこでは臨床とともに研究も行っています。

「坪倉正治医師は、震災直後から、地域住民の診療にもかわりつつ、放射線被ばくや長期避難による健康影響などの研究を続けていました。私が赴任したときには、坪倉医師らと地元の人たちには、強い信頼関係が築かれていることを感じました。そのようなチームの一員として調査を行うことができたのは、大変幸運でした。

この6月には乳がん患者の動向を調査した私

の研究論文が、英国の医学誌に掲載されました。これは震災後、医療機関受診の遅れによって、症状が進行した乳がん患者が増加している可能性を明らかにしたものです。その背景に、震災後に同居していた子どもなどの若い世代が避難したことで、家族サポートの減少がある可能性を指摘しました。

このように震災後、相双地域でどういうことが起こったのか、リアルタイムでどのようなことが起きているのか、その現実を明らかにし、学術的な形で後世に残そうとしているのが、私たちの研究といえます」

### ——本来は大学や行政が行うべきものでは。

「大学には大学の得意とする分野や手法があると思います。基礎研究や、大規模な予算や人員、複雑なスキームを必要とするタイプの研究です。例えば、震災後に福島県民を対象に行われている県民健康調査は福島県立医科大学の先生方が中心となって行われていますが、県庁をはじめとする多くの関係部署の調整が必要とする、大学が得意とする調査だと思えます。一方で、小規模ながらも、密に地元住民とコミュニケーションをとりながら進める調査は、私たちのような『地元の医療者』のほうがやりやすいかもしれません。どちらが優れているという話ではなく、それぞれ得意分野を生かし、補い合い、結果として、地域住民のためになる調査を続けられれば素晴らしいと思います」

### ——南相馬で坪倉先生、尾崎先生のやろうとしていることは、震災後の記録を残していく作業なのでしょうか。

「そのような側面は大きいと思います。そしてそれを具現化する上で、自分が医師であることは大きな強みになっていると感じています。なぜならば、長期的にこの地域にとどまって診療を行うことで、地域が持つ空気を肌感覚で理解し、調査に反映させることができるからです。また、医師として収入を得ることで、大学のポストがなく、研究費が得られなくとも、自分が

真に必要と思う調査を続けられます。調査結果を、そのまま診療の中で患者に還元できることも、やりがいにつながっています」

### ——今秋には、製薬企業の利益相反を隠した臨床研究を指摘した論文を執筆されました。

「私の中で、もともと乳がんは力を入れて取り組んでいる疾患でした。そのため、今年6月に世界で最も影響力を持つ医学誌の1つであるニューイングランド医学誌に、CREATE-X試験の結果が発表された時には、大変嬉しく思いました。この試験は、日本と韓国が中心となった乳がんの臨床試験であり、手術に抗がん剤カベシタピンを併用することによる生存期間の延長効果を示したものです。実際、この結果自体は素晴らしいのですが、論文においては、抗がん剤カベシタピンを販売する中外製薬と日本人著者とが利益相反状態にあることが、正確に申告されていませんでした。

日本においては、デジオバン事件を契機として、製薬企業と医療者・研究者の関係の透明性を高める機運が高まっています。利益相反の隠匿は、不適切な医薬品使用や製薬企業への不正な利益誘導につながり得るからです。そのため、CREATE-X試験における利益相反の申告違反は、大きな問題だと考えました。その点について英語論文において指摘したところ、海外の医療倫理の専門誌に掲載されました。医療者と製薬企業の不適切な関係が世界中で問題になっていることの裏返しだと考えています」

### ——この問題の本質は。

「医療者の立場として最も深刻に感じるのは、国立病院機構や国立大学を含む62カ所の医療機関において行われた本臨床試験で、倫理委員会チェック機構としての役割を果たしていなかった点です。

医療機関外の情報公開開示の義務をもたない組織を介在した資金提供は、重大な利益相反の隠蔽の温床となり得ます。このような利益供与は今後ますます増加する可能性があり、一層の透明性確保が喫緊の課題となるでしょう」

### Profile

◆おざき・あきひこ氏（32歳）

2010年3月東京大学医学部卒。国保旭中央病院、一般財団法人竹田健康財団竹田総合病院研修医を経て、14年10月からは南相馬市立総合病院に赴任。一般外科診療の傍ら、地域住民の健康問題に取り組んでいる。



尾崎氏は福島県・高野病院の支援に取り組んできた



アメフト 医学部6年間、「ニッチ分野だったら一番になれるかも」とアメリカンフットボール部に。クォーターバックを務めていた。何度も優勝を経験したことのある名門チームだったが、2部落ちも経験。卒業の年にレギュラーとして1部準優勝に貢献したという。